

# 菅原山天満寺宝珠院調査報告

藤卷和宏

現在、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「宝珠院所蔵資料の基礎的研究」の研究代表者として、大阪府大阪市北区に所在する菅原山天満寺宝珠院の資料調査をおこなっている。調査を開始して二年目、右の助成を受けて一年目であり、まだ資料の全貌を把握することすらできない段階であるが、本稿はこれまでの調査経過を報告するものである。

## 一 宝珠院の文化財

宝珠院は、現在は真言宗御室派に所属する寺院であり、また、かつて大阪天満宮の神宮寺であったとも推

定されている。近世に作成された縁起によると、空海（七七四～八三五）により建立され、菅原道真（八四五～九〇三）とも関係があったことだが、草創期の詳細を伝える資料は存在しない。中世以降は、鎌倉・室町・江戸時代の仏像も残るものの、寺院の実態的な側面については、資料から断片的に、応永三年（一三九六）に摂津国豊嶋郡と大和国添下郡を寺領として寄進されたことや、山科言経（一五四三～一六一一）・古田織部（一五四四～一六一五）・藤原惺窩（一五六一～一六一九）ら文化人との交流などが指摘されるにとどまる。

第二次世界大戦の大阪大空襲により大阪市は甚大な被害を蒙り、宝珠院も例外ではなかった。多くの寺宝が失われたが、宝蔵は奇跡的に被害を免れ、ここに収蔵されていた文献・絵画資料が現在に伝存する。

かつて大阪市教育委員会が宝珠院の文化財調査をおこなったが、これは主として仏像を対象とするものであり、文献と絵画についてはほぼ手付かずの状態である。大阪市教育委員会『大阪市内所在の仏像・仏画 宝珠院の仏像について』（『大阪市文化財総合調査報告書』二二、二〇〇〇）から、この時に調査された仏像を挙げておく。

- ・ 木造弥勒菩薩立像（十三世紀後半）
  - ・ 木造十一面観音菩薩立像（十三世紀後半）
  - ・ 木造天部像（室町時代）
  - ・ 木造仏龕（宝永八年＝一七一）
  - ・ 木造五大明王像（十七世紀後半～十八世紀前半）
  - ・ 木造地藏菩薩立像（平安時代末期か）
- これに加え、ごく簡単であるが、以下の文書と仏画が紹介されている。

・ 『摂州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起』（江戸時代末期・木版墨刷）

・ 寄進状（応永三年二月朔日権中納言雅□<sup>三九六</sup>）

・ 古田織部書状（年紀なし）

・ 絹本着色釈迦三尊十六羅漢図

・ 絹本着色仏涅槃図（寛文八年＝一六六八）

・ 絹本着色薬師如来画像（天保八年＝一八三七）

・ 絹本着色弥勒菩薩画像（天保七年＝一八三六）

・ 絹本着色普賢菩薩画像（天保十一年＝一八四〇）

・ 絹本着色地藏菩薩画像（天保四年＝一八三三）

・ 絹本着色阿耨羅迦三尊茶羅圖（文政二年＝一八一九）

・ 紺紙金泥種子星曼荼羅圖（文政十一年＝一八二八）

一八二八）

・ 紙本着色阿字（元禄元年＝一六八八）

・ 絹本着色弘法大師画像（室町時代末期）

・ 絹本着色渡唐天神像（狩野元信）

・ 絹本着色渡唐天神像

・ 紙本墨画束帯天神像

・ 紺紙金泥畢竟安樂経（寛文元年＝一六六一）

・紙本著色浪花名所図会

・朝日に松図（英一蝶）

・住吉明神号（伝豊臣秀吉筆）

・九字名号（慈雲）

これらのうち、木造弥勒菩薩立像・木造十一面観音菩薩立像・木造仏龕の三点は大阪市指定文化財であるが、今年度、さらに木造地藏菩薩立像と古田織部書状の二点が指定され、二〇一二年十二月五日から二〇一三年二月二十五日にかけて大阪歴史博物館で展示された（ただし地藏像は写真パネルによる展示）。

## 二 調査開始までの経緯

縁あって、私はこの宝珠院を調査する機会に恵まれたが、寺院資料の悉皆調査には多大な時間と人員を要する。二〇一一年三月まで東京在住であったため、まずは大阪での調査メンバーを編成することから考えなければならなかった。

二〇一一年六月十一日、以前から研究上の交流があった関西在住の坂口太郎・橋本正俊・船田淳一の三

氏とともに宝珠院を訪れ、予備調査をおこなった。現状では、多くの文献資料が木箱に収められるが、木箱の破損や不足によりダンボール箱に移されているものもある。これらが上下二段の棚に収められており、下段の箱数は約八十で、上段は未整理状態で正確に数えることはできないが四十箱程度と推測される。箱の形状も大きさも区々であるが、もつとも多いのが高さ70 cm前後×幅20 cm強×奥行30 cm強の俵桶箱であり、その中に五十冊前後の冊子本が収まる。冊子形態の典籍以外に、卷子本その他の形態のものも存し、内容は内典外典の多種にわたる。また、絵画も百点ほどある。数量・種類ともに、多くの研究者の協力なしには調査が立ちゆかないことは確実であった。

私は東京在住時より数箇寺の調査を経験してきたが、もつとも長期にわたり調査をしているのは京都市山科区の本山随心院（真言宗善通寺派）である。一九九九年に個人的な調査をおこなって以降、年に数回の調査を続け、後に同行者が増えて、二〇〇三年度には国文学研究資料館の共同研究「随心院聖教に見る

文学関係資料、および寺院ネットワークに関する研究」の研究助成に採択（研究代表者は同朋大学の渡辺信和）。助成期間終了後も、私的な研究会「隨心院聖教調査研究会」として調査を継続してきた。一方、前任教では研究代表者として科学研究費補助金・若手研究（A）「中世南都宗教言説史の構築」（二〇〇八―一〇年度）に採択された。中世南都の寺社・神仏をめぐる諸言説の展開を見とおすことにより「宗教言説史」という新たな枠組みの構築を目指す研究課題であったが、その基礎作業として、隨心院を含む諸所の寺院・文庫・図書館に所蔵される未公開資料の調査をおこなった。

こうしたこれまでの活動の中でもにも調査をしてきた研究者に声を掛け、隨心院聖教調査研究会を母体とし、他の寺社関係の資料調査にも対応できる組織として「寺社資料調査研究会」を立ち上げた。メンバーは関東、東海、関西、九州の各地域在住者で構成されており、設立時には二十三名、現在は三十二名を数える。

### 三 これまでの調査参加者

この中で、宝珠院調査への参加希望者の協力を得て、定期的に調査を継続している。原則として月に一回一日。参加者は関西在住者が中心となるが、長期休暇中には三日程度の日程を組み、他地域在住者も参加する。二〇一一年六月十一日の予備調査を第一回として、二〇一三年一月二十日までに計十八回、延べ二十八日の調査をおこなった。以下に、これまでの参加者を示す（五十音順）。なお、肩書きは二〇一三年一月末日現在のものとし、併せて専門分野を記す。

- ・ 植田 麦（群馬工業高等専門学校講師／日本文学）
- ・ 太田有希子（早稲田大学大学院生／日本文学）
- ・ 大塚 紀弘（国士館大学非常勤講師／日本史）
- ・ 大橋 直義（和歌山大学准教授／日本文学）
- ・ 坂口 太郎（京都大学大学院生／日本史）
- ・ 佐々木雷太（中国・山東大学威海校区翻訳学院日本語教師／日本文学）
- ・ 清水 紀枝（日本学術振興会特別研究員／日本美

術史)

・大東 敬明(國學院大學助教/神道学)

・西尾 知己(日本学術振興会特別研究員/日本

史)

・貫井 裕恵(早稲田大学大学院生/日本史)

・橋本 正俊(摂南大学准教授/日本文学)

・花川 真子(京都大学大学院生/日本史)

・浜畑 圭吾(龍谷大学非常勤講師/日本文学)

・日沖 敦子(神戸学院大学講師/日本文学)

・船田 淳一(日本学術振興会特別研究員/日本思

想史)

・古川 攝一(大和文華館学芸員/日本美術史)

・牧野 和夫(実践女子大学教授/日本文学)

・森 誠子(九州産業大学講師/日本文学)

・吉田 唯(兵庫大学短期大学部兼任講師/日本

文学)

・渡邊 卓(國學院大學兼任講師/日本文学)

以上、二十名。藤巻を含め二十一名である。

比較的点数の少ない絵画(仏画を中心とした絵軸)

は古川一人に任せ、他は文献資料を担当している。

二〇一一年度は助成金もなく、ボランティアとして協力していたのだが、二〇一二年度より藤巻を研究代表者として科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「宝珠院所蔵資料の基礎的研究」(二〇一二〜一四年度)に採択され、参加者に旅費と謝金を支払うことが可能となった。また、調書データの入力には前嶋茜(近畿大学大学院生/日本文学)に依頼している。こちらの謝金も科研費からの支出である。

#### 四 調査方法

まずは、所蔵資料の全貌を把握する必要がある。資料が、ただそこにあるというだけでは、ほとんど情報を得ることはできない。どのような種類の資料が全部で何点あり、どう分類され、どういう順序で保管されているのか。それを知るためには目録が必要となる。

多くの寺院で、什物や蔵書の目録が作成された。宝珠院にも、近世から近代にかけて作成された目録が何点か伝存する。これによって、数百年の長きにわたる

宝珠院所蔵資料群の動態（書写・校合・貸借・伝授・整理：等）の一面をうかがうことができ、非常に貴重な資料であると言えるが、しかし、これらの目録と現在の所蔵状況との間には、当然のことながら懸隔がある。すでに失われてしまった資料の名が見える一方で、これに記載のない資料が現存することもある。あくまで、その目録が作成された時点での所蔵状況が記されているのであり、続々と移り変わる経蔵の蔵書体系とリアルタイムに即応するわけではなく、さらには、所蔵されるすべての書物が記載されることも限らない。そもそも、寺院経蔵の目録は、内典を中心にまとめられており、教理に関わらない外典類は記載されにくい傾向にある。つまり、既存の（特に前近代の）目録によって所蔵資料の全体像を把握することは不可能なのである。

そこで、一点一点の資料に番号を付けながら調査を取るようになる。まず、箱に番号を付け、その中の典籍にも番号を付けてゆく。例えば、一番目の箱の三番目の本なら1・3。さらに、その本が数冊組みであ

れば枝番号を付けることになり、全十冊のうち五冊目であれば1・3・5という具合に。しかし、例えば十冊のうちの一冊が欠けている場合もある。それが寺院内に存在しない場合もあれば、他の箱に紛れ込んでいる場合もある。番号を付けながら復原できることもあれば、調査を取り終わってから気付くこともある。そのため、現段階で付けるのは、あくまで仮の番号である。

まずは大雑把にでも全体像を把握することが先決であると考え、調査の項目を最低限に抑え、簡易目録（棒目録）を二年目（科研の一年目）に完成させる予定であった。しかし予想以上に難航し、現時点で調査はようやく五十五箱目に達したところであり（データ入力は五十二箱目）、まだ全体の半分にも満たない。助成期間の残り二年では、目録の完成にすら到達できない可能性が濃厚となってきたが、ともあれ毎回の調査を続けてゆくしかない。

調査項目は以下のとおり。

- ① 仮番号（第□函／第□号／枝番□～□）
- ② 貼紙番号

③書記形態(写・刊)

④外題

⑤内題(内題がない場合は、扉題・目録題・序題・柱題・尾題・跋題等のいずれか)

⑥調査者認定書名

⑦装丁(卷子・折本・旋風葉・粘葉装・列帖装・袋綴「□目」・包背装・仮綴・一枚・疊・洋装・他)

※⑧表紙(原・後)／色／文様

※⑨料紙(楮・斐・楮斐・三桮・宿・間似合・近代紙・他)／厚さ・加工法等(薄・厚)(打・

漉返・他)

⑩数量(軸・帖・冊・枚・他)／残存状況(全・部分)

⑪寸法(表紙□糲×□糲)／※題簽／※匡郭(単・双)、界線(墨・白・押・他)、字高

⑫紙数(遊紙・墨付・白丁の区別せず) 計□(丁・紙・折)

※⑬保存状態(良・並・悪「破・汚・疲・虫」)／補修(有・無)

⑭蔵書印等(印文)

⑮所持・所蔵に関する書入(有・無)／位置／文面

⑯書写・刊行年月日

⑰書写・刊行者

⑱その他(奥書等)

⑲裏面記入(有・無)

調査の進展により、項目の追加・削除・変更もあったが、現時点では右のとおり。一般的な典籍調査の項目と大きく変わることはないが、簡易目録なので、※印を付した項目は原則として取っていない。それでもかなりの情報量である。

このうち、②の貼紙番号とは、「菅原山宝珠院」の朱印が捺された紙片に墨書されている漢数字のことである。これが表紙右上に貼付されている典籍があり、ある時点での蔵書の整理分類状況を示していることに気付いたため、途中でこの項目を追加した。近世の目録と一部は重なるが、目録に記されない典籍にも貼られていたり、逆に、貼付されていないものもあって完全

ではないが、蔵書群の動態を考える上である程度の指標になると思われる。

なお、これに類する情報は典籍を収納する木箱からも見いだすことができる。箱内の典籍の名称や往来経緯が箱の側面・背面、あるいは蓋の表・裏に墨書されているほか、漢字・漢数字の記された紙片が貼付されていることもある。漢数字は、典籍に貼られるものと同様、近世の目録に一部一致するものの、それが箱内の典籍と必ずしも一致しているとは限らない。書写、校合、貸借、伝授、整理等を経て、何度も入れ替えられたりしていたのであろう。また、数字以外の漢字が記された紙片も散見し、おそらく千字文による分類の痕跡であろうと思われるが、これと対応する目録は現時点では見付かっていない。ともあれ、このように箱自体も豊富な情報を有していることから、こうした情報も詳細に記録する必要がある。なお、箱の破損も多く、補修・新調も必要となってくるが、こうした箱自体の価値・情報の保存との両立が課題となろう。

## 五 今後の展望と宝珠院調査の意義

簡易目録が完成すれば、所蔵資料の全体像を見渡すことが可能となる。そして、次の段階では、この目録に基づき、それを増補・修正しながら詳細な書誌情報を記録してゆく。その項目は、前掲の基本的な書誌事項のほか、典籍の内容に立ち入った事項（例えば構成・章段名・他資料との関係・挿絵の内容…等）も含む。こうした情報に基づき詳細な目録を作成するのであるが、研究者にとつて有用な情報を概観し、検索しやしい形式の目録を目指す。そのためには、検索を支援する基本的な書誌情報に加え、調査者の知見によって関連付けられるべきその他のターゲット・キーワードとして情報を抽出することが必要となるが、これらの情報は画像データと併せて整理し、デジタルコンテンツとして各情報を関連付けた情報集積体としてデータベース化してゆくことが望ましい。これにより、資料群の通時的な動態を把握することが容易となり、作業効率も格段に向上するはずである。しかし、ここまで徹底するには、膨大な時間・人員・資金の確保が必要

となるので、次の科研費獲得を目標とする。

それとは別に、冊子体の報告書を刊行し、諸分野の研究者に配布したいと考えている。この報告書には、目録や論文のほか、調査の過程でその重要性が見いだされた資料も、写真や翻刻として掲載し紹介する。現在のところ、これまで宝珠院との関係が不明であった真言密教三宝院流との接点をうかがうことのできる資料数点を確認済みであるが、中でも、随心院所蔵の三宝院流典籍と系統の異なる写本で、かつ、随心院本には記されない伝来経緯を詳細に示す奥書を有する『玄秘抄聞書』等の典籍は、翻刻紹介する価値が高いと思われる。また、伝来経緯は不明ながらも、華嚴僧明恵(一一七三～一二三三)関係資料としては新出である可能性のある『明恵上人御入滅記録』も重要な資料であると推測している。

なお、右の『玄秘抄聞書』等を書写したのは高照という僧である。これまでの調査で、この高照のほか、定照・智照という僧の存在が浮上した。十八～十九世紀の住持であるが、彼らは高野山や四国等、多くの寺

院で非常に精力的かつ丁寧な諸典籍を書写・校合しており、書写奥書の情報量も大きい。宝珠院の蔵書形成を考察するに際し、暫定的にこの三人を基点として進めてゆくことが妥当ではないかと考えている。

現在、各地でおこなわれている寺院の悉皆調査のうち、日本文学研究者が関わるものとして、如来寺(福島県)・真福寺(愛知県)・勸修寺(京都府)・金剛寺(大阪府)・善通寺(香川県)等の調査があり、所蔵される文献資料全体を対象とすることにより、個別の資料を対象とする調査とは異なる成果が期待できる。これは、単に調査対象となる資料の点数が多いということだけでなく、資料群を一つの集合体として捉え、かつ、書写・校合・貸借・伝授・整理……といった行為から資料群の動態(蔵書の形成と変容)を通時的に把握することにより、関係する人物・諸寺院の知識体系をも闡明することが可能となるからである。これはさわめて重要な視角であり、こうしたスタンスによる調査対象寺院の拡大は、日本文学のみならず、多分野の研究に

大きな成果をもたらすことになろう。

宝珠院調査はこうした研究動向の一翼を担うことになり、一方でまた、大阪市内の寺院としては稀有な例となる空襲を免れた資料の多さを誇る寺院を調査することは、研究資源の整備と提供、あるいは文化財保存という面からも意義深い。

それに加えて宝珠院の特色を述べるならば、真言宗寺院に期待できる一般的な事項（密教関係資料の存在・密教諸流派の伝授・弘法大師信仰：等）のほか、①寺院名にもなっている宝珠Ⅱ如意宝珠信仰、②大阪天満宮との関係、天神信仰、③山科言経・古田織部・藤原惺窩ら著名な文化人との交流：等、いくつかの要素を挙げることができる。こうした側面にも注意を払いながら進めてゆくことで、宝珠院を起点として浮かび上がる中世から近代に至る諸寺社・人物のネットワークが明らかとなり、悉皆調査との相乗効果により、個別の寺院や地域を越えた思想的・学問史的研究に資する成果も期待できるのである。

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「宝珠院所蔵資料の基礎的研究」による研究成果の一部である。